

## 勿凝学問 132

社会保障への還元率と政府の規模  
人生で一日余計に働いた日の講義

2008年1月17日  
慶應義塾大学 商学部  
教授 権丈善一

昨日の水曜日、講義のために教室に向かって階段を昇っていたら、講義を履修している学生2人ほどが階段を降りてきていた。「どうしたんだ？」と尋ねると、「教室に誰もいない」とのこと。教室に行くと、確かに人っ子一人いない……。

どうも昨日の水曜日は、ハッピーマンデー<sup>1</sup>の代講日ということらしい。となれば、僕の講義は先週で終わっていたわけだ。

でも、せっかく君らもきてしまったんだから、なんか話すかと、先ほどの学生を相手にしゃべりだす。

彼らは、この人数で講義をやられたら身が持たないと考えたのか、携帯で仲間に連絡をしたようで、話し始めてしばらくすると、キャンパスにいた数人が集まってきた。

昨日欠席した普通の学生さんのためにも、昨日話した内容のなかで公にできる箇所だけでも、ここにまとめておこうと思う——実は昨日、せっかく来たんだからなど、公にできない話が9割くらいあったんだけど、それはマル秘。

さて、昨日、黒板に描いていたのは、次の絵。

---

<sup>1</sup> 月曜日に移動した国民の祝日一覧。

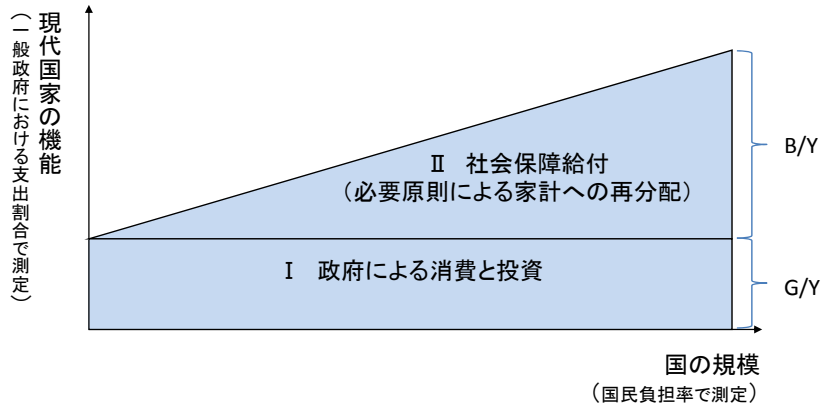
成人の日（1月15日 → 1月の第2月曜日 2000年～）

海の日（7月20日 → 7月の第3月曜日 2003年～）

敬老の日（9月15日 → 9月の第3月曜日 2003年～）

体育の日（10月10日 → 10月の第2月曜日 2000年～）

# 国の規模と現代国家の機能



2

Keio University Y Kenjoh

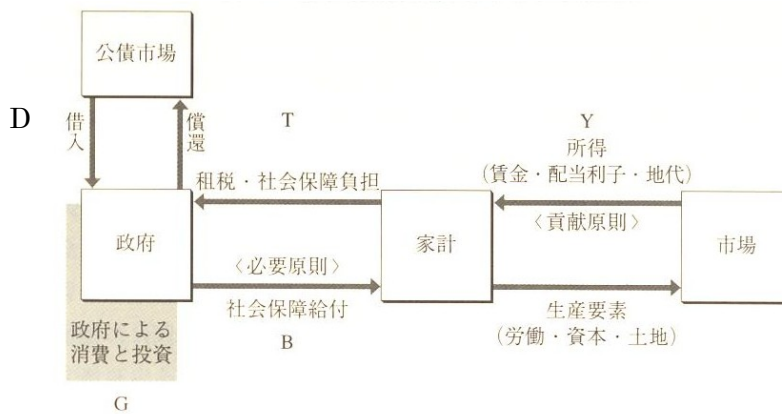
ここで、B/Y とか G/Y の記号については、次の勿凝学問 50 政府の利用価値の中の文章を参照されたい。

## 勿凝学問 50 [政府の利用価値](#)

国のかたちは社会保障が作るということを、これまでよく口にしてきた。そのことを確かめてみよう。社会保障の機能をまとめた次の文章に目を通してほしい。

権丈(2004), pp.141-2.

図 1 再分配政策としての社会保障



社会保障は、国民の基礎的消費部分を社会化すると同時に、それに要する資源を社会から優先的に確保しているのであり、この目的を所得再分配という手段を用いながら行っている。この所得再分配としての社会保障は、図1の概念図に沿って説明できる。まず家計は、生産要素を市場に供給し、その見返りとして所得(Y)を得る。市場の分配原則は、生産要素が生産にどの程度貢献したかに応じて分配するという〈貢献原則〉である。この1次分配から、政府は公権力を用いて、租税・社会保障負担(T)を強制的に徴収する。また政府は、公債市場から資金(D)を調達する。そして政府は、徴収した

資金を用いて、公務員を雇用したり、公共事業を行ったり、国防などの公共サービスを供給したり（G）、さらには公債の償還を行ったりする。そして政府は、徴収したかなりの部分を、今度は、社会保障給付（B）として、家計が必要としている程度に応じて所得を分配するという<必要原則>にもとづいて再分配する。ようするに、社会保障の基本的な役割は、市場の分配原則である<貢献原則>にもとづいた所得分配のあり方を、家計の必要に応じた<必要原則>の方向に修正することなのである。

ここで、次の記号を定義する。

- Y=国民所得（NI）  
T=租税社会保障負担  
B=社会保障給付
- $T/Y$  = 国民負担率  
 $D/Y$  = 財政赤字対国民所得比  
( $T+D$ ) / Y = 潜在的国民負担率  
 $G/Y$  = 政府消費・投資の国民所得に占める割合  
 $B/Y$  = 社会保障給付の国民所得に占める割合

国民負担率を、日本、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、そしてスウェーデンについて試みる。

表 1 国民負担率(2003年：%)

	国民負担率 T/Y	財政赤字対国民所得比 D/Y	潜在的国民負担率 (T+D)/Y
日本	36.2	10.7	46.9
日本(2006)	37.7	6.1	43.8
アメリカ	31.8	6.6	38.4
イギリス	47.1	4.2	51.3
ドイツ	53.3	5.1	58.4
フランス	60.9	5.6	66.5
スウェーデン	71.0	0.1	71.1

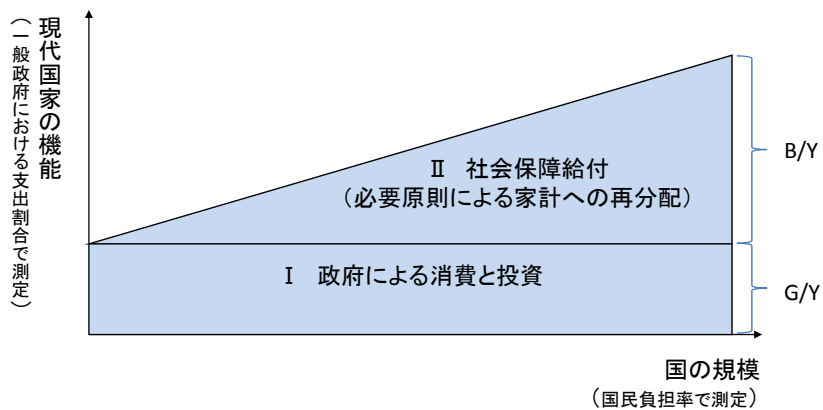
この前、新しく総理になった方は、「国民の負担をできるだけ抑えて」と言っていたようであるが、おそらく彼が意識している「国民の負担」は、国民負担率、もしくは潜在的国民負担率のことなのであると思う。

ところで、この国では、表1にみる潜在的国民負担率5割というような目標が、新聞紙面や雑誌などでやたら取りざたされるのであるが、図1にみるように、現代の国家は、国民から租税・社会保険料を徴収するのみならず、社会保障給付（B）を家計にわたしているのである。お上が民百姓から取り上げるだけ取り上げて、彼ら民百姓にはほとんどなんの施しもししていなかった時代の五公五民とは話がちがう。

表1にみるように、国民負担率（T/Y）は各国大きく違うのであるが、その違いは、社会保障の給付（B/Y）によってほとんど説明がつく。要するに、政府が、通常、経済学の中でく

公共財>とされている部分を供給する「政府による消費と投資(G)」という1階部分に、経済学的には私的財とみなされがちな医療や年金などの「社会保障(B)」をどれほど2階部分として上乗せするかということが、その国が小さな政府になるのか大きな政府になるのかを決めるのである。ということで、僕はしばしば、最初に紹介した次の図を描くことになるわけである。

## 国の規模と現代国家の機能



2

Keio University Y Kenjoh

さてここで、『月刊保険診療』新春号にある座談会の中の本田宏先生と僕の話をも、ここで紹介。

### 「座談会 医療崩壊の先に何があるか」『月刊保険診療』

**本田** 私は、必要経費が小さな政府にしろと言ってるんです。そして、国民が出した金がかちゃんと戻ってくれば、先生がおっしゃるように税金を上げるのにも賛成ですよ。それがそうじゃないから私は許せないと言ってるんです。例えば、スウェーデンでは100万円出したら70万円戻ってくる。日本は100万円出しても40万円しか戻ってきません。

**権丈** だから社会保障に用途を限定した社会保障税にしようと言ってるんです。社会保障以外には使えませんという財源を作るとのことです。

**本田** それはそれでよいかもしれませんが、ただし、今みたいに財政システムそのものにムダの多い状況のまま導入したのでは、社会保障税で社会保障のみがうまく回るというようなことはないように思います。

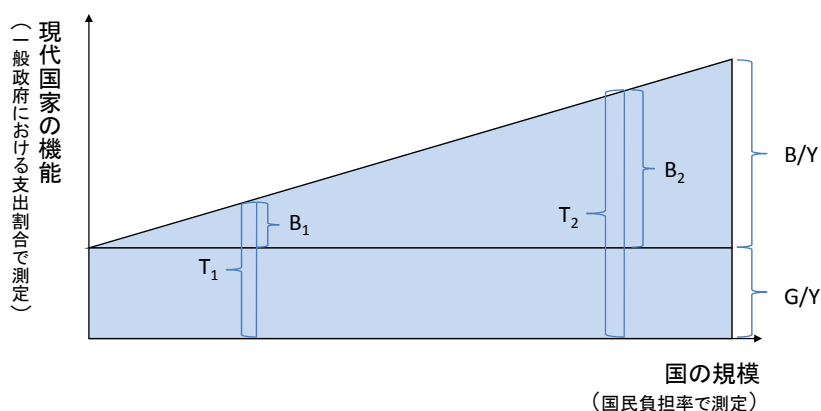
**権丈** それから今も言いましたように現代国家というのは、基礎的な政府支出に上乗せして社会保障を積極的にやるかやらないかで大きな政府、小さな政府が決まる。だから、大きな政府のスウェーデンは負担額から社会保障に回る割合が大きく、小さな政府の日本はその割合が小さくなるんです。日本で100万円出してスウェーデン並みの70万円戻ってくるようにするには、日本の政府を大きくせざるを得ない。

僕の言っていること、わかるかな？

おそらく、僕のようなことを言う人は、日本中、ひょっとすると世界中で僕一人だと思う。世の中には、租税社会保障負担（T）からの社会保障への還元率が日本では低い、これは政府が非効率なせいであり、この還元率を西欧並みに上げることができるとすれば、およそ何兆円の財源が浮く——というような話ばかり。還元率は、政府の効率、非効率を示す指標のように考えられて、実際、OECDもそういう意図でこの値を出しているようでもある。

でも、違うんだよね。還元率というのは、次の図における  $B/T$  のような値なんです。

## 国の規模と現代国家の機能



3

Keio University Y Kenjoh

小さな政府の  $B_1/T_1$  よりも大きな政府の  $B_2/T_2$  の方が大きいのはあたりまえ。還元率  $B/T$  を大きくするためには、そりゃあ、政府による消費・投資部分の効率化は大切なんだけど、やっぱり基本的には、社会保障の負担と給付からなる一国における所得再分配装置の強化をはからなければならぬわけだ——負担増絶対反対派からみれば残念なことだろうけど。

と、今日も、世の中にあるお決まりの論法に対する異端のお話でした。これまでも、[公的年金バランスシート論批判](#)をはじめにして、次から次にそうだったけど、これから僕は、どれくらい、世の常識に対して異端妄説を吐き続けるのだろうかよ。

福澤諭吉『文明論の概略』より

昔年の異端妄説は今世の通論なり、昨日の奇説は今日の常談なり。然ば則ち今日の異端妄説も亦必ず後年の通説常談なるべし。学者宜しく世論の喧しきを憚らず、異端妄説の譏を恐るゝことなく、勇を振て我思う所の説を吐くべし。

まあ、恐れちゃいないけどね。

さて、やらなくても良い授業をやり、その後は3時くらいから、どうもやらなくてもよ

かっただしいゼミを時間延長して——途中で教室にピザを出前してもらってみんなで腹ごしらえをしながら——8時半くらいまでやり、それから院生と食事に出かけ、その後、ゼミの学生と銭湯で待ち合わせして2時間ほども風呂やサウナで講義(?)をし、その後は、深夜の中華でお店のおねえさんがいつも薦める志村けんをみながら——学生を連れてこの店にこの時間に来るのはゼミのある水曜日の夜に決まっている模様——生ビール片手に講義して、帰宅は、2時過ぎ。どうも、人生で一日分、余計に講義(?)をした気がしないでもない。最後まで生存していた者たちも、ご苦労さん。

## 追記

「全国医師連盟」のホームページで公開されている、2008年1月13日に行われた本田先生の[講演パワーポイント](#)。

次の新春論壇の注2もご参照下さい。

- 「新春論壇 [社会保障関係者、2008年の選択——国論三つ巴となる財源調達論](#)」『週刊社会保障』No.2463, January 2008 Volume62.

それと、昨年(2007)の12月10日に終えている次の座談会も参照されたい。

- 「[座談会 医療崩壊の先に何があるか](#)」『月刊保険診療』

出席者 (50音順)

権丈

小松秀樹氏 (『医療崩壊』著者・虎ノ門病院泌尿器科部長)

近藤克則氏 (『健康格差社会』著者・日本福祉大学教授)

本田宏氏 (『誰が日本の医療を殺すのか』著者・埼玉県済生会栗橋病院副院長)

川渕孝一氏 (『日本の医療が危ない』著者・東京医科歯科大学教授)